

[翻 訳]

『スペクテイター』(6)

——第46号から第55号——

門 田 俊 夫

第46号 1711年4月23日(月曜日)

【アディソン】

不調和なものには苛立ちを覚える。(オヴィディウス)¹⁾

私は新聞記事のネタが欲しくなれば、面白い出来事を求めて外出することになっています。そして、何か適当な題材に出くわしたら、その場でヒントを書き留めるのです。一方、我が寄稿者からの手紙に目を通し、思索の題材に相応しいものがあれば、データ集にそのメモを書き込みます。このようにして、私はしばしば私以外の人にはたわごとにしか思えないヒントを一杯書き込んだ紙を持ち歩いています。そのメモは不明瞭、混乱、たわごと、不整合以外のなにものでもありません。要するに、これは、混沌に陥った世界のよう、明瞭さ、特徴、まとまりを一切欠いた私の思索の出発点となる材料に過ぎません。

一週間ほど前、私がたまたまいつも競売が行なわれるロイズ・コーヒーハウス²⁾でメモのひとつを落としたために、とても奇妙な出来事に遭遇しまし

1) 『変身物語』1.9.

2) ロイズ・コーヒーハウスは1687年頃タワー・ストリートに創設され、1691年にロンバード街に移った。そこではしばしば、船舶、商品、書籍などが「小さなロウソクが燃え尽きるまでに落札する形での」競売が行なわれた。

た。落としたことに気づかないでいると、その紙切れを見つけた人たちがコーヒーハウスの片隅でそれをだしに楽しんでいたのです。私が気づいたときには、彼らがあまりにも笑い転げていたしたので、それを自分のメモだと認める勇気が出ませんでした。彼らはひとしきり笑い終えると、コーヒーハウスのボーイがそれを持って、落とされた方はいらっしゃいませんか、と歩き回りました。でも誰も名乗り出ませんでしたので、それを読んでいた愉快な紳士連中は、落し主が出て来るようにみんなに向かって、競売の台上で読み上げるようにとボーイに指図しました。そこで、ボーイは台の上にあがり、よく通る声でつぎのように読み上げました。

覚 書

サー・ロジャー・ド・カヴァリの田舎の邸宅…そう、私はおしゃべりが嫌いだから…疑問、善良なキリスト教徒が魔法使いになったら…嬰兒殉教の日、塩売り、番犬、フクロウ、コオロギ…ロンドンのトマス・インクル氏、アキリーズ号という見事な船で、ヤリコ…救出…亡霊…婦人の書斎…職業はライオンの洋服屋…ブーケファラスという名のヒトコブラクダ…衣服と装身具、婦人の最高の幸せ…注目されるチャールズ・リリー…妬みを買わない短い顔…過剰気味の三職業…ラティウム王と新兵…豚肉を貪り食うユダヤ人…ウェストミンスター寺院…グランドカイロ…遅延…エイプリルフール…青い雄豚、赤いライオン、鎧を着けた雄豚…王と二人のフィドル奏者単独で登場…醜悪クラブへの入会…美、なんと向上することか…真実と虚偽のユーモアを備えた家族…オウムの学校の女教師…顔の半分がピクト人あとの半分がイギリス人…悲劇の主人公は全員身長が6フィート以上…ため息をつく人たちが集まるクラブ…花瓶、脇掛椅子、タベストリー、ライオン、雷からの手紙…人形芝居で鐘が鳴る…ひげのある老婦人と蒼白くすべすべした顔の少年の結婚…隣人の青いコート…火箸と鉄灸の話…花の染物師…兵士の祈り…ありがた迷惑の薬壺…金時計付きの靴下をはくパクトルス…竹、棍棒、バチ…女主人の長女のしくじり…額に星を付けた黒い雌馬…理髪店の柱…ウィル・ハニコームのコートのポケット…カエサルの振る舞いと私の振る舞いの似通った

事情…ごた混ぜの詩…誰もアキリーズの殺戮を憤らない…女性の秘密の会合…色目使いの達人。

この紙切れを読み上げたことで、コーヒーハウス全体がとても愉快的な雰囲気になりました。血迷った人物が書いたものだと考える人もいたし、誰かがスペクテイターから書き留めたのだと考える人もいました。外観からみてとても裕福な市民に思えるある人物が、何度か考え込むようにウィンクとうなずきを繰り返しながら、紙切れに書かれていることに何か含むところがないかといっていました。つまり、彼としては、ヒトコブラクダ、鉄灸、理髪店の柱という言葉に何か別の意味が込められていると考えた訳です。そして、彼は、ボーイはこの紙切れを国務大臣にでも届けるしかないと思うと言いました。彼はさらに金時計付きの靴下をはく異様な人物の名前が気に入らないと付け加えました。たまたまコーヒーハウスに叔父と一緒に来ていたオックスフォード大学のある学生が、パクトルスの正体を明かし、³⁾このご立派な市民の計略を冷やかしました。みんながこの罪のない紙切れについてあれこれと推測している間に、私はその紙切れを受け取ろうと、台から降りて来たボーイに手を差し出しました。ボーイは何も言わず私に手渡しました。これはみんなの注目を浴びましたが、私はその紙切れにぎっと目を通し、二度首をかしげ、まるでマッチのようにし、それで一服つけました。この間私は、終始、表情を変えず、沈着に振る舞い、押し黙ったままだったので、周囲のものは賑やかに笑っているだけでした。その持ち主であるという疑いを免れていましたので、私は大いに満足し、周りで起っていることは一切気にかけることなく、タバコとポストマン紙に没頭しました。

我が読者なら、上述の内容は半ば以上私がすでに使用しているのに気づかれることでしょう。また、まだ触れていない題材は今後の楽しみの準備だということが容易に想像できるでしょう。だが、あいにくこの出来事によって

3) おそらくミダース王が水浴びをし、砂金が出ることで有名なリュディア(小アジア西部の富裕な古王国)の川の名前に因んだ洒落だろう(オヴィディウス『変身物語』11.87参照)。

先手を打たれてしまいましたので、最後の二つのメモに関する手紙を紹介しておくことにします。このひとつは、ここに述べられているような妻の軽率な熱意によって私事で大いに苦しんでいる数多くの夫が存在しているとの情報が無かったら、私は公表する積りはありませんでした。こういった妻にはソールズベリ主教が旅行記で引用している「彼女は、敬虔過ぎて不信心になった」という異邦の題辞をあてはめることが出来ます。

拝啓

私は、非国教徒、とりわけフレンド会で一般的となっている福音書に対する悪口に苦しんでいる不幸な人物のひとりです。⁴⁾彼女は一日の大半を、午前中の講話、正午の礼拝、夜のミサ前の祈禱で費やします。説教師が同席していない限り、夕食で何を食べたか彼女にはほとんど分かっていません。説教師には会員と思われる仲間が付き従います。一方、彼ら以外の人たちは関係のない者と考えられています。彼女と二人だけになるとときには、彼女は単なる説教のコルク鉄砲と化し、絶え間無く聖句や証言や教訓を繰り返す口にするので、たとえ私はどんなに疲れて就寝しても、頭からその雑音が離れず翌朝まで眠りにつけないほどなのです。何卒、貴殿が、こういった苦しみを持つ私およびその他多くの人々の惨めな状態に同情し、すみやかな救いをお与え下さるようお願いする次第です。さもなければ、生きていることの幸せが死を妨げる限り、間もなく、講話や説教や祈りをあてにすることになるに違いありません。

敬具

R.G.

二通目は色目使いの達人に関するもので、つぎの通りです。

観察者殿

小生はアイルランドの紳士で、自己の向上を目指して長年にわたって旅を

4) 当時しばしば嘲笑の的になったクエーカー教徒に対してスペクテイターが行なった初めての言及。

して来ました。その間に、現在洗練されたヨーロッパ諸国で実践されています色目を使うという技を身につけました。友人の助言を受けまして、かような適格者である小生は色目を使う達人⁵⁾として身を立てる所存であります。午前中は教会で、灯ともりしころには劇場で、色目の使い方を教授します。小生は又、闘牛場に相応しい新たなあわただしい色目の使い方も修得しています。これは黄昏どきとか窓明かりが入らないようにした場合には昼日中にいつでも教授します。小生の手になる手書きの『完璧な色目使い』を備えており、いつなんどきでもお見せする用意が来ています。ところで、この手紙の内容を広告の形で公表して戴きたくお願い申し上げます。何卒、宜しくご配慮下さい。

敬具

第47号 1711年4月24日(火曜日)

【アディソン】

聡明であるなら笑いなさい。(マルティアリス)¹⁾

ホッブズ氏は、私には彼の著作の中で最も優れたものと考えられる人間性についての論説の中で、笑いについて極めて入念な意見を述べて、つぎのように結論づけています：「笑いという感情は、突如生じる誇らしさの感情以外の何物でもない。笑いは、他人あるいはそれまでの自己の弱点と比較することによって、そのときの自己に、突然、なんらかの卓越さを意識する場合に生まれる。人々は、突然これまでの愚行を思い出し、現時点で自己に恥辱を伴っていない場合に、その愚行を笑うのだ。」²⁾

それゆえ、ホッブズ氏によれば、ある人物が自分は愉快だとは言わないで、大笑いしている場合には、その人は非常に誇らしく思っていることになりま

5) 第20号参照。

1) 『エピグラム』2.41.

2) トマス・ホッブズ(1588-1679)『人性論』(1650)9.13.

す。実際に、この深部をのぞいてみますと、ホップズ氏の意見には私たちを納得させる多くの所見が見出されるでしょう。誰でも自分よりも劣った人のことを笑います。かつてイングランドの貴族の館ではどの館でも、ベティコートを着せた専属の道化を囲っておくのが習わしでした。館の主人はことあるごとに、道化をからかい、その愚かさに接して気晴らしをしたのです。³⁾同じ理由から、ドイツのほとんどの宮廷では、今でも白痴がひっぱりだこのなです。ドイツでは、公爵は誰でも必ず、お仕着せを着せ、名高く申し分のない道化を二、三人従者に加えています。そして、廷臣たちがひっきりなしに道化をからかっているのです。

機知とユーモアよりも刻苦勉励で名高いオランダ人でさえ、街路のあちこちに「ぼかんと見とれる人」つまり、帽子をかぶり、鈴を付け、羽目を外したように大口を開けている白痴の顔の看板を掛けています。アムステルダムではこれがいつも物笑いの標的となっているのです。

このように、誰でも、眼前に嘲笑的がある場合には、理解力や才能の点で自分よりも劣っている誰かをだしにして気を紛らわせるのです。この点に関して、デニス氏がつぎのような滑稽な二行でとても上手く表現しています。これはボワロー氏の諷刺の翻訳の中に出て来ます。

かように道化は相手に向かって舌をだらりと突き出し、

兄弟に向かって空っぽのオツムを振る。⁴⁾

ホップズ氏の考えを読むと、どうして上述の取るに足らぬ人々が粗悪な趣味の持ち主たちに笑いを誘うのかが分かります。だが、もっと思慮分別のある人の笑いはそういったありきたりのものによっては引き起こされませんので、優れた感覚と知識の持ち主に笑いを誘うものが何なのか考察する価値があります。

3) 中世以降には、道化が職業として宮廷や富裕階級の邸宅に受け入れられた。サフォーク伯爵家の道化、ディッキー・ピアスはスウィフトによって墓碑銘に謳われた。

4) ボワロー『諷刺』4.

第一に、あらゆる国の人々が称賛し、古い格言によると、⁵⁾「食べてしまいたいほど」可愛がっていると思える一連の愉快な道化者が存在していることを認めなくてはなりません。つまり、道化者とは、国ごとで一番お気に入りの食べ物の名前と呼んでいる例の放浪の才人のことなのです。彼らはオランダでは「塩漬けニシン」、フランスでは「ジャン・ポタージュ」、イタリアでは「マカロニ」、そしてイギリスでは「ジャック・プディング」と呼ばれています。いろいろな食べ物の名前が付いているこういった愉快なおどけ者たちは、周りの人たちを笑わせようとして、いつも道化の衣裳をまとして登場し、一挙一動、言葉のはしばしに、周りの人々が恥じ入るほどのへまや間違いをしでかすのです。

しかし、このさきやかな悟性に対する勝利感は、笑いの仮面をかぶって、いたるところで流布しているエイプリルフールの習わしにおけるほどははっきりしたものではありません。この日には、みんな出来るだけ大勢の人をかつこうとします。愚かさが明らかになればなるだけ、一年のほかのどの日よりも数多くの笑いが起こることになります。小間物商を職業とし、非常に浅薄な氣取り屋の私の隣人は、エイプリルフールにはこの10年間で人をかついだのは百回を下回らないと自慢します。⁶⁾私の宿の女主人は、子供たちみんなに、彼女の言う「取るに足らない使い走り」に出すことで、二週間前に彼と諍いを起こしました。長男には靴屋に半ペニーのリンネルテープを買いにやらせ、長女には半マイル先まで怪物を見に行かせました。要するに、無邪気な子供全員がかつがれたのです。いな、女主人までそれを免れませんでした。この

5) アパーソンはスペクテイターのこの箇所とすでにスペクテイター以前からあった「私はプディングのようにあなたが好きだ。もしあなたがパイなら食べてしまいたい。」と「私はあなたを食べることができるくらい好きだ。」を引用している。

6) OED におけるエイプリルフールについての初出は1687年。スウィフトは、1711年4月1日、ステラに「バッキンガム公爵邸が昨夜地震で倒れ、半分地中に飲み込まれたんだ。見に行かないかい。いやいや、エイプリルフールだよ、エイプリルフール。」と書いた。

誠意にかける人物は、それ以来ずっと、そういった気紛れを面白がっているのです。

こういった機知は一年のうちで一日だけに限られる場合は、それなりに結構なことです。ところが、近年、毎日人をかつごうとする巧妙な輩が出現しているのです。こういった紳士諸氏は一般に「かつぎ屋」という名で分類されます。つまり、彼らはたえず自分たちの生み出した間違いを笑うことに関わっている人種という訳です。

従って、人々は洗練されている度合いによって、愚か者を自分より低いあるいは高い階級の人たちの中から選びます。もっと哲学的な言い回しをしますと、一般に笑いと呼ばれる密かな高揚と誇らしさは、自分自身と、それがたまたま生来の愚か者であれ人為的なものであれ、自分よりも下位のものとを比較することによって生じます。実際には、私たちが笑う相手が概して自分たちよりも聡明な人物である場合も大いにありうることですが、もし彼らが私たちに笑わせるとすると、笑いをかきたてる点では彼らは私たちに及ばないに違いありません。

思索が少し難解になりすぎるきらいがあると思われませんが、私はつぎのように考えています。賢者が私たちに笑わせる場合には、それは彼自身の人格あるいは彼の他人への見方において何か奇妙な点あるいは弱点をその人が示すからであり、また私たちが獣あるいはさらに生き物でないものに笑いを催す場合には、それはかすかにではあるが、そこに人間の犯すへまや馬鹿げた行為と類似しているなんらかの行為あるいは出来事が伺えるからです。

ところで、通常の生活になりますと、私は観客全員を感動させることが出来る例の舞台の伊達男のことは無視し、彼らがいないとクラブつまり愉快的集まりが存続できない、そのような会話で陽気さを引き起こす特殊な人種について考えてみます。つまり、たえず篤志家や仲間の機知とからかいにさらされ、会話で男、女、子供、敵、味方を問わず、みんなから「あざけりの標的」とされている律義な紳士諸氏のことなのです。私はこういった「あざけりの標的」となっている人物を何名か知っています。⁷⁾彼らはなんらかの風変

わりな気質、容姿あるいは振る舞いの不幸な役回りのために、いつも相手を愉快にさせるという不運をかこっていますが、機知に富み分別のある人たちなのです。実際には、滑稽な役回りとはいえ、それ相応の機知と快活さを備えていない人は「あざけりの標的」となる資格がありません。愚かな「あざけりの標的」が任に耐えるのは平凡な人たちを相手にするときだけです。機知に富む人々は、自分たちに活動の場を与え、馬鹿げた振る舞いで自らを奮起させる「あざけりの標的」を必要とします。こういった心得のある「あざけりの標的」はしばしば自分への笑いを受け止め、つぎに相手に向かってその嘲笑を投げかえます。サー・ジョン・フォールスタッフはこの種の英雄でした。彼は自分の「あざけりの標的」の能力について、つぎのように巧みに述べています。愉快な騎士は「誰も彼もみんな俺をあざけって得意がっている。人間の頭では、俺が考えてやるか、俺をダシにして考えない限り、笑いを誘うことは何一つ思いつかないのだ。俺は自身機知に富んでいるばかりではなく、他人までも機知に富ませているのだ。」と言います。⁸⁾

第48号 1711年4月25日(水曜日)

【スティール】

様々な変装によって、彼はしばしば進入路を見つける。

(オヴィディウス)¹⁾

寄稿者のみなさんは、私が時々手紙を受け取ったとお知らせしないと気を悪くします。最も有効な方法は大切なテーマについて書かれている手紙を何通か公表することでしょう。私を名誉会員にするのに相応しいと考えて下さったクラブ宛てに書きました二週間前の私の手紙と一緒に、寄稿者からの手紙を紹介致します。

7) アディソンはジョン・デニスのことを念頭に置いていたのかもしれない。

8) 『ヘンリー四世』第2部1幕2場。

1) 『変身物語』14.652-3.

醜悪クラブ会長ならびに会員の皆様へ²⁾

謹啓

貴クラブへの入会をお認め下さる通知を拝受しました。どうも有り難うございました。私にはその価値がないものと思われまので、ことあるごとに、私よりも確実に資格を有する人物を貴クラブにご紹介かつ推薦致しまして、私の不足分を補いたいと存じます。来週の会合に列席するために、乗合馬車にてそちらへ伺う積りです。その際、男女各1名の候補者をお連れします。一人は年かさの洒落者で、あと一人は現代のピクト人です。³⁾もし彼らにみなさんが期待なさるほどの持って生まれた適性が顕著に伺えないとしましても、彼らの後天的な醜さというものは、これまでに出現したどなたよりも際立ったものなのです。洒落者はここ30年というものの毎日服を着替えており、持って生まれた醜さがさらに一層増しています。ピクト人はさらに際立った長所を発揮します。彼女は分別の付く年頃になって以来ずっと、美しい人たちの集まりは遠ざけ、可能な限りの努力をして今度みなさんにお見せる顔立ちとなっているのです。

敬具

観察者より

追伸 貴クラブは貴顕紳士淑女の入会は可能でしょうか。

4月17日

観察者殿

私たち女性の中には、敢えて醜くなろうとする誠実さと不屈の精神を備えており、また心からそう思われたがっている人たちが存在することをお知らせしたいと思います。実は私がそう願っている一人なのです。どうか関心をお寄せ下さり、私を醜悪クラブに推薦して戴きたいものと存じます。もし私の言葉だけでは不十分でしたら、もっともこの場合は女性の言葉だけではと

2) 第17号、第32号参照。

3) 第41号参照。

ということかも知れませんが、私は、たとえ髪の毛、額、目、頬、あるいは顎であろうと、醜悪クラブの一員に相応しい資格の持ち主であることを証明する確実な証人をお連れすることが出来ます。さらに、私の体は左側に傾いているのだと付け加えておかなければなりません。私が、あらゆる点で好ましい存在であることを願っています。ユーモアと陽気さに関しましては、会長に匹敵することでしょう。私のお願いとしましては、私が愉快的会話の仲間入りを希望しています初めての女性のようなので、テーブルでは上位の席に着かせて欲しいということです。実際、みなさんが肉を切り分ける係を必要としていましたら、みなさんの希望通りに醜くその役を務めることが出来ます。私の申し立てに対するあなたのお考えを出来るだけすみやかにお知らせ戴きたいものと思います。私の容姿につきまして付け加えておきますと、あなたがご自分の顔の短いことを紹介なさるまでは、どうなっているのかは私は気づきませんでした。私の顔の長さは優に45、6センチはあると思います。上述の顔が醜さに相応しい評判があると分かれば、私はそういった顔を作り上げることでしょう。でも、お話にならないほど不運なことに、私に伴う評判といえ、不愉快な可愛らしさだけなのです。そういう訳ですので、どうか私をこの世のあらゆる醜さの前兆となる人物にしてください。あなたはラテン語を理解なさいますが、必ずそれを持ち出して下さいますようお願いします。

草々

ヘカティッサ

観察者殿

貴殿の気取りに関する論説を拝読しました。⁴⁾そしてそのお考えをもとに私自身の心を厳しく吟味し、今後は気取らずに暮らす決意をするとともに、その密かな達成方法を見つけ出したと思った次第です。だが、残念なことに、

4) 第38号参照。

いま私は、その原因が分からない愚行をいくつか犯していることに気づいたのです。私は年を取り、ひどい痛風に悩んでいるのですが、常に女性に気に入られようとするひどい見栄があるのです。そのため、ひとときも気が休まることなく、甲の部分が艶だしの封蠟を塗った皮製のかかとの高い靴を履いています。二日ほどきついのを我慢して履いていたところ、シティーのある友人の家に招かれました。そこではご婦人方に会うことになっていました。私は足を引きずりながら、いつものように慇懃に彼女たちに対応しました。とても贅沢な食卓も、感じのよい人たちも、心尽くしのもてなしも、煩わしいことに私の苦痛を増大させるだけでした。その家の主人は私の状態に気づき、乾杯をした後、衆目の監視の中、私の面目を失わせ、彼自らの手で自分の古靴と履き替えさせたのです。品のよいご婦人方の面前でのこの行為を、生来気取り屋の私は、どうしようもない窮地に陥った人たちが助けを受け入れるときのようにしぶしぶ受け入れました。楽になった私は、私に課せられる厳しい負い目を大目に見ました。そのときには体の異状は取り除かれたのです。この教訓をもとに、今後は永遠に愚行を犯さないことでしょう。このように、私は受けた思いやりに感謝している次第なのです。

敬具

エッピング、4月18日

拝啓

私たちは毎朝、貴紙を持ち寄っております。先日の悲劇の主人公にまつわる間違った装身具に関する記事⁵⁾、とても面白く読ませて戴きました。貴殿の思索は私たちにとってとても時宜を得たものとなっています。と言いますのは、現在、当地で、劇にお門違いの壮麗さを与えるのとは無縁の旅役者の一座を迎えているからなのです。彼らは間違った華やかさに陥るところか、舞台は原初的な荷馬車なのです。『アレキサンダー大王』⁶⁾は紙の首巻きを着け

5) 第42号参照。

6) 第31号参照。

た人物が演じました。翌日の『エセックス伯爵』⁷⁾は貧困以外の難儀は抱えていないように見えました。そして当日の午前中に演じられたフォッピング卿⁸⁾は、洒落者であることを示すには色とりどりの靴下を履かせるだけでなくもっと素敵な何かが必要でした。要するに、我が旅役者たちは何日も田舎劇場をはってきているのですが、それでも窮乏しており、貴殿が劇場での使用を禁止なさっている備品類を首尾よくお送り戴けない限り、主人公はただの頑健な乞食、女主人公はジプシーにしか見えません。それでもひとつだけきちんとした衣裳で上演されたものがありました。それはクロドペイト判事⁹⁾でした。これはとても成功しましたので、オーバードゥー判事¹⁰⁾の気分を損ねました。私たちの見ているところで、彼は(人形芝居のドンキホーテのように)非常に感情を高ぶらせ、旅役者たちに向かって、もし憐憫を誘うなら、それは打ちひしがれた王子や君主という登場人物にではなく、彼ら自身の風采に対してなのだ、と言うのでした。そしてまた、もし彼らが人々の心を掴むのが得意なら、乞食という職業に相応しく、橋のたもとや教会の入口でそうすべきだ、と言いました。彼らは異教の兵士やアレキサンダーといった人物を演じるのでは満足できないので、それを期待しているに違いない、そして大胆にも治安判事の一員を馬鹿にしているに違いないと、その判事は言うのです。

7) ジョン・バンクス (c.1652-1706) の『不運な寵児、エセックス伯』(1681) は 1710年11月20日と12月28日にドゥルリー・レイン劇場で上演された。ウィルクスとナイト夫人が出演。

8) フォッピング卿は、1704年12月7日初演の自作『軽率な夫』のシバーの持ち役。シバーは1711年2月19日にドゥルリー・レイン劇場でこの役を演じた。

9) 「過度にロンドンを嫌っている」判事クロドペイトは、トマス・シャドウェル (c.1642-92) の『エブソム・ウェルズ』(1672) の登場人物。1710年4月12日にヘイマーケット劇場で、1710年12月1日にはドゥルリー・レイン劇場で上演され、クロドペイトには双方ともジョンソンが扮した。1710年7月20日にはペンケスマン劇場でリーがクロドペイトを演じた。

10) オーバードゥー判事はジョンソンの『バーソロミューの市』(1614) の登場人物。この劇は1711年3月8日にドゥルリー・レイン劇場で上演された。

敬具

第49号 1711年4月26日（木曜日）

【スティール】

私たちの書物は人の香りがする。(マルティアリス)¹⁾

陽気な人たちの集まり、あるいは女性たちの集まりに向いていない人がコーヒーハウスで見られるような会話を喜びとするのはごく自然なことです。気質が私と似通った人は、コーヒーハウスのようなところでは、水を得た魚になります。なぜなら、喋れないならそれだけみんなにとっては心地よい存在となり、同時に、一方的聞き手にまわることで自分も楽しめるからです。人と話をするときにまず心掛けなくてはならないことは、相手が聞き役にまわりたがっているか、それとも、自分が聞き役にまわるのかを見極めるべきだということです。これは、それほど人に知られていない秘訣ですが、暮らしの中においてはとても有益なことなのです。後者つまり聞き役になるというのはより一般的な願望であり、日々引き立てられている人を褒め称える言葉は一言も口にしません、相手が話すことはどんなことでも巧みに気を配り、実に上手く相手を喜ばすことが出来る人たちを私は知っています。私たちは身分の高い人たちおよびその客人たちの振る舞いに非常に好奇心をそそられますが、これと同じ感情が身分の低い人たちにもあります。観察する以外にはすることのない私は、この人の多い町のあらゆる教区、街路、横丁、裏通りで、邸宅を構えている有力者そして身分の高い人たちの場合と同じ手管でその有力者の親愛と愛顧を得ようとへつらっている人たちを見掛けます。

私が頻繁に出入りする場所では、他の人に比べて優れた点があるからというのではなく、一日の内の時間帯によって、目立つ人が入れ替わります。朝6時のコーヒーハウスでは、私の友人の服飾品商ビーバー氏²⁾が我が国の延

1) 『エビグラム』10.4.10.

臣や将官の誰よりも多くの嘘偽りのない友人や賞賛者をかき集めます。おそらく、ビーバー氏の周りにいる人たちはみんな新聞を手に入れているでしょうが、彼がぐわえていたパイプを手にし、新たな状況に同盟国側がいかなる方策をとるか主張を始めるまで、誰ひとりヨーロッパの王室が講じる手段について自分の考えを述べることは出来ません。私たちの出入りするコーヒーハウスはある法学院のそばにあります。ビーバー氏は6時から8時15分前までは、周りの人たちから注目され感嘆されます。あと15分で8時になるといった頃には、法学院の学生たちがやって来て、彼の話は中断します。朝8時には、ウェストミンスターに出掛ける服装をし、まるで自分たちがすべての事件に関わっているかのようなせわしい顔つきをした人たちがやって来ます。また、自分たちはウェストミンスターへ出掛ける予定はないかのように、ナイトガウン姿で時間をつぶしにやって来る人たちもいます。私は散歩の途中でそれほど都合よく私の気分を不機嫌にさせたり笑わせたりするものに出くわすとは限りません。「ギリシャ」「スクワイア」「サール」³⁾あるいは法学院近辺のその他のコーヒーハウスに出入りする若者たちは、ひとえに自らの怠惰を披瀝するために早起きしているに過ぎません。こういった若い「学者」はスカーフと多彩なガウンならびに派手な帽子と上靴を威厳のしるしとみなしていると思われるでしょう。なぜなら、こういった空虚なものが自信をもって彼らひとりひとりに接近し、彼らはそれを自分たちのまともな服装と考えているからです。慇懃で流行に身を任せているという評判から卓越した人物が生まれるのを私は見て来ました。他者を上手く統轄しているストロベリー・サッシの紳士は、昨年冬のオペラはすべて前もって切符を購入し、現在ある女優から引き立てられているようなのです。

こういった紳士諸君が忙しくて悠々としていられない時間帯になると、こ

2) この人物の原型はフィッシュ・ストリート・ヒルのリンネル生地商ジェイムズ・ヘイウッドと考えられている。

3) 第1号参照。ギリシャがテンプル、スクワイアがグレイズ・イン、サールがリンカーンズ・インの近くにあった。

の席は仕事を持っているか良識のある人たちに取って代わられます。彼らは仕事の交渉か会話を楽しむためにコーヒーハウスにやって来ます。私はこの二種類の人たち、つまり、とても活動的で、ひとりで引きこもっているのでは幸せで満ち足りた思いがしない人や、また、心があまりにも暖かいので生活の務めや人間関係を見捨てできない人たちの振る舞いや話に注目することになります。有徳の士はこの種の人たちからなっています。みんな善良な父であり、寛大な兄弟であり、誠実な友であり、忠実な臣民です。彼らの楽しみは妄想というよりは理性によって導かれます。そのため、彼らの談話や行動には性急な点や不安定な点は何一つ伺えません。彼らの顔つきを見ていると、くつろいでおり、感情的になったり、何か新しいことを追求してこせこせせずに、時の流れにまかせて、一刻一刻を静かに味わっているのが分かります。こういった人たちが、社会そして私たちが「親しい間柄」という言葉で表現するささやかな共同体を形成しているのです。

コーヒーハウスは近隣に住んでいる人たち全員にとっての溜まり場になっており、そこで静穏を味わい、日々の暮らしに楽しみを与えるのです。この種の人たちが集まる昼日中には、ユーピュラス（良い忠言を与える者）がその場の中心人物となります。彼は新しく出費することがなく相当な資産家であり、何か公的な場に出ることもなく、気高く有益な資質を存分に発揮します。彼の分別と知識はそれを活用しようと考えている人たちに役立ち、知人たち全員のコンサルタント、判事、執行官、友人の役目を果たします。そして彼は尽力に伴う金銭を要求しないだけでなく、普通そういった尽力に対して払われる敬意も賛辞も求めません。彼は、感謝の気持を表わすと不機嫌になるのです。彼に示すことが出来る最高の謝意は、自分が彼の骨折りに相応しい人物であること、そしてまた、自分も、彼のように、他人に恩恵を施す用意があるのだということを分かってもらうことです。

友人が切迫した事情にある場合には、彼は公開株に投資すれば大いに増すことが出来るほどの大金を貸し与えます。彼はお金は思いのままに増えるものとは考えていなく、友に貸す方がためになるのだと考えている訳です。

ユービュラスはこの昼日中の客人たちに大変威信がありますので、彼があるニュース記事に首を横に振ると、全員意気消沈したように見えます。一方、彼が事態は上手く行くとほのめかしているようなときには、食欲も旺盛でまた機嫌よく正餐をとるために家に帰って行きます。それだけに止まりません。彼らは、彼に対する崇拜の念があまりにも強いために、彼らがほかの人たちといるときには、喋り方も振舞い方も彼の真似をするのです。彼らは彼の考えは熟知しており、テーブルに着くや否や、コーヒーハウスで彼がやる通りに、期待したり危惧したり、喜んだり落胆したりします。要するに、彼らは、彼が目を放すとすぐに、全員ユービュラスになる訳です。

これまで夜明けから正餐の時刻⁴⁾までのそれぞれの中心人物について述べてきましたので、午後の支配者については機会を改めることにし、この一連の話については暴君トム⁵⁾の話で終わりにしたいと思います。夜11時から12時にかけては、このコーヒーハウスの初代代理人のトムが統轄し、酒や石炭の手配、燃え殻の処分に関して、配下の召使たちにこの上なく専制的に指示を出します。

第50号 1711年4月27日(金曜日)

【アディソン】

自然の姿と知恵は矛盾するものではない。(ユヴェナリス)¹⁾

約1ヶ月前、我が国に四名のアメリカインディアン²⁾の首長²⁾がやって来た

4) スティールはタトラー紙第263号で「私の記憶では、正餐は次第に12時から3時へと移行している。何時に落ち着くかは誰にも分からない」と書いた。スウィフトは『ステラへの日記』で1711年7月10日の大蔵卿との正餐について「4時になって席に着いた」、そして7月28日、ウィンザーで再び大蔵卿と正餐をとったときには、5時だと記している。

5) タトラー紙第16号、第26号に出て来たホホワイト・チョコレートハウスの給仕「サー・トマス」のことであるのは明らか。

1) 『諷刺』14.321.

とき、私はしばしば野次馬の中にまぎれ込んで、一日中彼らの後を追いかけてきました。そして、目にするものすべてが物珍しく、不思議な感動にとらわれました。彼らが帰国してから、私はある友人に頼んで、彼らの礼儀作法や生活様式ならびに我が国での発言内容に関して、彼らの宿泊先であった室内装飾業者³⁾にいろいろ尋ねてもらいました。というのは、私にこの訪問者がどういった人たちかを正確に把握したい気持ちがあったこともさることながら、彼らが私たちのことをどのように考えているかを知りたかったからです。

私の友人が宿泊人について根掘り葉掘り聞きたがっているのを知ったこの室内装飾業者は、しばらくして、きっとサ・ガ・ジーン・クワ・ラッシュ・トウ王が書いたもので、何らかの手違いで忘れて行ったと思われる文書を一束友人のところへ持ち込みました。今ではこの文書は翻訳されており、とても風変わりな所見を盛りだくさん伺うことが出来ます。この文書には首長たちが我が国に滞在中に示したささやかな友愛の情が伺えるものと私は思います。読者のために本日の紙面ではその一端を披露したいと考えます。その他の点についてはいずれまたお伝えできるものと思います。「ロンドン」という項には、どう見てもセントポール大寺院⁴⁾のことと思われますが、つぎのような話が記載されています。

-
- 2) 1710年4月、イロクォイ人の首長4名が植民地軍のピーター・スカイラー大佐ほかその他の指導者たちに連れられてロンドンにやってきて、カナダのフランス軍に対する軍事行動への本国政府の助力を懇請した。イロクォイ人首長たちは4月19日にアン女王に謁見した。その後、ロンドンをあちこち案内された。これに関しては、リッチモンド・ボンド『アン女王とアメリカの首長たち』（オックスフォード、1952）が詳しい。
 - 3) ロンドン滞在中の首長たちの逗留先は、室内装飾業者トマス・アーニ（音楽家トマス・アーニと女優シバー夫人の父）の店ザ・トゥー・クラウンズ・アンド・クッションズで、場所はコヴェント・ガーデンのキングズ・ストリートにあった。
 - 4) 1666年の大火で燃え落ちたセント・ポール大寺院は、サー・クリストファー・レンの設計でつい最近完成したところだった。礼拝は1697年には聖歌隊席を使って行なわれるようになったが、完全に完成したのは1710年のことだった。

「町の最も高くなったところに、巨大な家が建っている。私の部族民全員が入れるくらい大きなものだ。同胞のリバーズのイー・トウ・コム首長に言わせると、この建物は偉大なる神の手によって作られ、その神がまつられているということだ。グラナジャおよび六部族⁵⁾の首長たちは、この建物は土からなっており、太陽や月が創られたのと同じ日に創られたのだと信じている。だが、私の考えでは、入手した情報を総合してみても、この巨大な建築物はこの国にある実に様々な道具類を駆使して現在のこの形にしたのだと思う。おそらくこれは最初は山頂にあった形の歪んだ巨大な岩であり、この国の人々が均斉のとれた形に切断した後で、それを途方もない労力をかけて運び、中をくりぬき、今日見られるようなあの美しい丸天井や空洞に仕上げたのだろう。岩をこのように入念に削った後で、夥しい数の人たちをわずらわせて、外側を削り、丸石の表面のように滑らかにしたのだ。そしてあちこちに先端を葉冠で縁どった数多くの木々の幹のような柱を刻んだのだ。何百年も前のことだったと思われるが、この大変な作業が始まったときには、おそらくこの国の人たちの間には何らかの信仰があったのだろう。というのは、彼らはこれに寺院という名前を付けており、人々がそこで礼拝をするために作られたという言い伝えがあるからだ。実際、この国の人々がその昔、何らかの礼拝をしていたのだと思わせる根拠がいくつか存在している。なぜなら、彼らは七日目ごとに聖なる日をもうけているからだ。しかし、私とその聖なる日にそこに入って行って見ても、人々の振る舞いには信心に伴うもののしきは何一つ観察できなかった。確かにほかの人たちより一段高いところに黒い服を着た人が一人いて非常に熱心に何か口にしてるように見えたが、ほかの人たちはどうかというと、大半は神を崇めずに、互いに挨拶を交わしているのであって、かなりの人たちは居眠りしていたのだった。

この国の女王の指示で、私たちには私たちの言葉をほぼ理解できる人物が二人ついた。だが、まもなくこの二人が互いに大変な敵同士であるのに気づ

5) それほど明確ではないが、アディソンはここで第3、第4の首長について言及している。

いた。彼らはしばしば意見が異なったのだ。その内の一人に言わせると、この国には「ホイッグ」という名の人間の姿形をした一種の怪獣が横行しているということだった。彼はしばしばこのホイッグに出くわさなければいいのだが、出くわすようなことになれば、私たちが首長であるということで打ち倒されることになりそうだから、と言うのだった。

もう一人の通訳はホイッグ同様の怪獣である「トーリー」という名の一種の動物の話題をよく口にし、このトーリーは私たちがよそ者ということで不当な仕打ちをするだろうと言うのだった。この二種類の生き物は生まれながらにして互いに密かな反感を抱いており、両者が出くわせば、ちょうど象と犀のようにごく自然にいがみ合いを始めるように思える。しかし、この種のどちらにも出くわさなかったことを考えれば、ガイドが作り話をして私たちの気を紛らし、この国に実在しない怪獣の話をして私たちを面白がらせたのではと思われる。

通訳の話からかろうじて理解できたのは、つぎのようなことだ。私たちは通訳の言葉はところどころしか分からなかったため、後から私たちだけの間でその意味の不十分な部分を埋め合わせて、出来るだけきちんとまとめることにした。この国の人々は手工芸品に対してはとても手際よく器用だが、大変な怠け者であり、尊大でひょろ長い体つきの若者たちはしばしばポーター二人がかつぐ小さな乗物⁶⁾で街を往来している。また、服装はとても野蛮だ。首は絞めつけ、胴体はいろいろな紐で縛りつけており、私たちの国ではすっかり見かけなくなっているカタル性疾患に罹っているのではと思わせるほどである。私たちは頭部をあの美しい鳥の羽で飾り立てるのだが、この国の人々はぞっとするようなふさふさとした頭髪を買い占め、背中の中ほどまでもじゅもじゅに垂らしている。その姿で街を往来し、それがあたかも自分の毛であるかのように威張っているのである。

6) 「紳士たちは椅子(かご)に乗っている。料金はとても安く、1週間1ギニー、1時間1シリングであり、かごかきはヴェニスのゴンドラの船頭のように、ポーターの役目もし、使い走りもする。」(ケイニグ、219頁)

この国の人々の気晴らしに招かれた。私たちは優秀な人々が牡鹿を追い詰めたり棒を投げたりするのを見物でき、誰が一番能力があるか分かるものと期待していた。だが、そうではなく、私たちが連れて行かれたのは沢山のロウソクが灯っているととても広い部屋だった。その部屋では、怠惰な人たちが3時間以上にわたってじっと座ったまま他人が行なう手の込んだ芸当を見ていた。どうやら、芸当をする人たちはそれでお金を貰っているようだった。

この国の女性に関しては、彼女たちと直接話が出来なかったもので、距離を置いた感想しか述べられない。女性は髪の毛をととても長くしている。だが、男性が他人の毛で誇示しているのに対して、女性は、とても美しい髪の毛ということだが、それを団子状に結わえ、見られないように覆っている。女性は天使のように見える。もし顔に、時折とても奇妙な形状になっている黒い小さな斑点がなければ、太陽より美しく見えることだろう。私はこの小さな斑点がすぐに消えるのに気づいた。だが、ある箇所の斑点が消えると、別の箇所に出来るのだ。私の気づいた限りでは、午前中顎にあった斑点が、午後には額にあったのである。」

筆者はその後引き続き乗馬用ズボンやベティコートの馬鹿馬鹿しさ、およびその他多くの奇妙な観察結果について述べています。それについては別の機会に譲りたいと思います。しかしながら、本日の紙面を終わるにあたって、私は、こういった未開の人の言辞のなかにも、あちこちにととてももったもったな意見があることに注目せざるを得ません。同時に、このアメリカインディアンの日誌の抄録に見られる偏狭な考え方については、私たちにも同じようにその弊害があるのだと言っておかなくてはなりません。つまり、私たちも他国の習慣や衣服や礼儀作法が自分たちの国のそれらと違っている場合には、往々にして、それを滑稽でとっぴなものと考えてしまうものなのです。⁷⁾

7) 本日の新聞が発行された翌日、スウィフトは『ステラへの日記』に「スペクテイターはアディソンの助けを借りてスティールが書いている。実によく出来ている。昨日は、私が随分以前にタトラーのためにと思って彼に与えた素敵な助言を、つまり、イングランドにやってきたアメリカインディアンのこ

第51号 1711年4月28日（土曜日）

【スティール】

それでも、彼は淫らな言葉から耳をそらす。(ホラティウス)¹⁾

観察者殿

私には、富も素養も容姿も、町のどんな若い女性に負けないくらい十分に備わっています。私はあらゆる虚栄を享受できますが、非常にきちんとした教育を受けたことで、公の場や集まりで見られる新しい雰囲気や流行が大嫌いなのです。これは芝居の作風に大いに影響されているものと私は考えます。昨夜、『吊い』²⁾を観ましたが、劇中自惚れの強い恋する男が恋人の女性について「ああ、あのハリオットは！うっとりするほどの身悶えをやめて我が腕へ、やっと言いなりになったのだ！」と語ります。こんなことは決して操正しくまっとうな観客の前で口にすべきものではありません。このことに関するあなたのご意見を期待します。貞節と謙虚さについて、観察者としてのあなたのお考えをお待ちします。

草々

一愛読者より

この若いご婦人の苦情はきわめてもっともなことであり、これは愛人の細

とを記事にしていた。スティールが文章にすることは思っていなかった。私はその件で本を書く積りだったのです。この件に関しては彼はこれでネタ切れになると思います。昨日の記事のネタもすべて私が与えたものなのです。スティールにもアディソンにも会っていませんが。」と書き記した。

1) 『書簡詩』2.1.127.

2) スティールが創作した最初の喜劇で、1701年12月に出版された。この作品はこの日の新聞の2日前、つまり4月26日の木曜日の晩にドゥルーリー・レイン劇場で上演された。手紙は金曜日に書かれたかもしれないが、時間があまりないことから、スティール自身が書いたと考える人もいる。

やかな心遣いと謙虚さを主張できない人たちを不快にさせる要因となるに十分です。だが、作家のために言うておかななくてはならないことが多々あります。もし観客が5幕通じて生きのよい対話を維持することが難しいのだと分かれば、作家が機知に富んだ話を願い、もはやそれしか観客を喜ばすことが出来ない場合には、作家がちょっとした下卑なことを採り入れて作品を仕上げて認めることでしょう。私は、作家たちのために、いまだかつて創作力の不足以外の理由で淫らな言葉を書き記した作家はひとりもないのだと申し開きをしておきます。多数の観客を集める作家のように目立つことが出来ない場合には、その作家が当然頼りとするものは、みんなに共通することになります。つまり、作家に洗練された想像力を楽しませることが何もないときには、官能的な欲望を満たす描写が採り入れられることになる訳です。作品中に、この種の、そしてまた一般に官能的な表現と言われているものが侵入するのは、こういった創作力の不足のせいに違いありません。

機知の欠如を埋め合わせるこの方便は、多かれ少なかれ、これまで舞台で成功をおさめてきたすべての作家が利用してきたことです。もっとも種の繁殖という欲望を基礎にして公然と作品を書いた作家は私はひとりしか知りませんが、『もし彼女に可能ならば』³⁾という作品の中で、婦人が何をいわんとしているのか私に分かっているとすればの話ですが、その作家とは、洗練されたサー・ジョージ・エサリッジなのです。ほかの作家たちも、ここかしこに、婦人が装う変装や気取りのもとで、この着想があることをほのめかしています。でも、エサリッジ以外の作家は誰ひとりこの効果を確信していなく、喜劇の最初から終わりまで、この一点に観客の想像力を集中させてしまうのです。常にしかるべく事が運びます。この手段に訴えるものが全員であれ、無邪気な人だけであれ、『もし彼女に可能ならば』を考えてみると、常に好評を博してきたのです。

3) サー・ジョージ・エサリッジ (1636-92) の1668年の作で、3月19日にドゥルリー・レイン劇場で上演された喜劇。ナイト夫人がレディー・コックウッド役を演じた。

ひどく退屈な文章も、淫らな身のこなしが付け加えられると、高尚になります。そうしても高尚にならないほどお粗末な場合は、その倍の身のこなしをつければ、つまらない意味にも活力が与えられます。才能があるとの評判を手に入れた作家は、笑いを引き起こしたり拍手を呼ぶために、必ずこの秘訣を利用します。芝居を通してしか女性のことは何も知らない私は、無邪気に一階席に陣取り、踊り子たちのペティコートの襲撃を受けることで、女性の全体像を巧みに憶測することが出来ます。退屈な芝居には、美しい人たちが大いに役立つのです。作家の魅惑的に書く力が弱まるときには、美しい娘が淫らな動きをし、そのことが作家にとっては同じ好結果をもたらします。この場合、退屈な作家は、鈍感な食客とパトロンの関係と同様で、観客を利用するのです。つまり、作家たちがこれ以上機知やユーモアで観客の気を紛らわすことが出来ない場合には、悟性より劣っているのですが、何か彼らの気質に心地よいことを提供して、彼らの注意を誘うのです。アピキウス⁴⁾は美味しい食べ物話題になると、満ち足りた感を抑えることが出来ません。クロウディウス⁵⁾も奔放な美人のことになるとそうです。とはいえ、観客のこういった嗜好を呼び起こさないとしたら、会話で何が至当で細やかな心遣いかをきちんと判断できる人は誰もいません。しかし、私が以前に述べましたように、分別のある人よりも普通の人のほうが話し掛け易いのです。

官能的な点では、ほとんど学問を積んでいない作家が最もたけているのは注目すべきことです。この点では当代の女流作家たちが驚くべき成功をおさめています。まさにその行為への予備的な場面を導入したのは『イブラヒム』⁶⁾を書いた婦人です。その場面では、皇帝が、愛人に宮殿の最も奥まった部屋まで自分の後からついてこさせる合図に、ハンカチを投げます。明らか

4) ガピウス・アピキウスはティベリウス（42B.C.-A.D.37）時代の有名な食道楽者。

5) クロウディウスは豊饒の女神ボナ・デアの神秘を汚した名うての放蕩者。

6) 『第13代トルコ皇帝イブラヒム』はメアリ・ピックス夫人（1666-1709）作の悲劇で、初演は1696年。

にこのトルコ皇帝は上機嫌で舞台から退場したに違いありませんが、思うに、外で待ち構えているのは悲しげな人物だったのです。淫らという点では、この独創的な婦人が別の同性の作家に磨きをかけました。この作家は『流浪者』⁷⁾の中で、地方の郷土を綿のズボン下姿にさせるのです。ブランドはあてがはずれ、皇帝は最後まで望み通りになると推察されます。ほぼ裸同然にまでするというおふざけは、それ以来、(実際にはここがその始まりだったのでしょうが) パーソロミューの市⁸⁾における大当たりのだしものとなっています。

上述の女性の作品『流浪者』では、流浪者がごく頻繁に、つまり1幕で1回以上は同じ使命を帯びて使いにだされている点は無視することが出来ないと思われます。男性の作家は主要な登場人物に集中し、女性の作家もその自由が与えられているということですから、これは全面的に不自然という訳ではありません。従って、男性の才人が主人公に大金持の女性をあてがうように、女性の才人は終幕では、女主人公に立派な洒落者をあてがうことになります。しかし、実際には、そのままで進行する芝居はほぼ皆無で、主人公あるいは女主人公は、そのため、気取った足取りで退場し、主人公が私たちにどんな立派な暗示を与えているのか考えるのは私たちに委ねられるのです。すなわち、その後については、私たちの好きなように考えるしかないので。率直に言うと、芝居に精通している人は、自分が魅惑的な暴君あるいは幸運な放蕩者の女衞としてどれだけ活用されてきたか思い出せば、自分自身にとっても敬意を払うことになるでしょう。ここぞというときに役者が退場すると、ご婦人方は必ず一階席から詮索するような一瞥を投げ掛け、その成り行

7) 『流浪者、またの名を追放された騎士党员』はアフラ・ベーン夫人(1640-89)の1677年の作品。1711年3月22日に、ドゥルーリー・レイン劇場で上演された。

8) パーソロミューの市は、毎年聖バルトロメオの祭日(8月24日)に、ニューゲイトの北、ウェストスミスフィールドの3エーカーの敷地に立つようになった。第1部は3日間にわたる牛市だった。その他、2週間にわたって、オモチャ売りや道化、ロープ渡りの曲芸師、珍しい生き物など様々な見世物にぎわった。

きをどんな風を楽しむのかを確かめます。そして、淫らな愚か者たちは平静を保ち、無造作な表情を浮かべようとします。こういったことから、婦人中には劇場に全く足を向けない人もいますし、どんなに淫らであっても二度目には落ち着き払って観ることが出来るように、新作の初演は必ず見逃さないようにする人たちもいます。⁹⁾

自分は芝居を書くのに適任だと考えている才人たちが、歓びを提供するためにこういったあさましい方法に頼らずに、つまり、悪徳と享樂を詰め込むのではなく、観客の心に宿る生来の有徳の衝動に訴えかけて歓びを引き出すように心掛けたなら、彼らは私たちを満足させるだけでなく、同時に、私たちのよき協力者となることでしょう。かりに目新しい書き方をしようとしても、いま立派な紳士と言われている人が、隣人や友人の名誉や夫婦関係を暴き、劇中の女性の半数と関係を持ち、作品に別の配役を添え、最も素晴らしい女性を与えられても、もし大団円で彼が暴君であることが判明し、それ相応の軽蔑を受けるようであれば、思うようには観客の気を晴らすことは出来ないでしょう。一度に複数の女性に身を捧げる人物はまれなので、作家が登場人物に相応しい誠意をもって接すれば、十分自分たちの思うように観客の心をつかむチャンスはあります。

心地よい登場人物に接して楽しむことが出来ないほど自暴自棄に、つまり、虜となるほど酒と女に入れ込む人はいません。節度があり寛大で雄々しく貞節で信義に厚く誠実な人は、同時に、機知、ユーモア、陽気さ、立派なしつけそして勇敢さを備えていると言ってもさしつかえありません。こういった人はこれらの資質を発揮する一方で、あらゆる機会をとらえて、自分がその他の気高い美德の持ち主であることを示すことでしょう。彼らは分別のある人が快樂に身を委ねると、その人を襲い、非難するでしょう。非難された人は自分がこれまで間違っていたのだと気づき、生活を楽しむのに相応しいも

9) 新作の上演初日には、当時の徳高い婦人たちは仮面をつけて観劇にやって来た。その後、仮面は娼婦がつけるようになり、劇場で仮面を着けることは娼婦であることのしるしとなった。

のは、健全な体と汚れない精神をおいてほかにはないのだと確信するので、真の鑑識眼をもつ人なら誰でも、自らの大望をここに振り向ける才人を祖国にとっての友人であり恩人だと言うことでしょう。これとは反対の目的のために自らの能力を利用する人のことを彼らが何と呼ぶのかは私には分かりません。

第52号 1711年4月30日(月曜日)

【スティール】

優れた功績のお陰で、彼女はあなたのものとなり、
あなたは幸せな家系の父となるでしょう。(ヴェルギリウス)¹⁾

聡明な寄稿者というものは、威勢のよい細君のように、常に決定的な意見を述べるものです。私の先日の醜悪クラブへの手紙²⁾は、ことのほか突然の訪問を約束していましたので、返事を貰えるものとは思っていませんでした。ところが、彼らは私にいくら敬意を払っても払いきることはないと考えて、早くも返事を出してきたのです。私と類まれなヘカティッサとの結婚の提案に関しては、ひとつだけ異議があります。つまり、クラブの人たち全員が彼女と知り合いになりたがるでしょうし、女性側があれこれ好みが出来る場合に、その女性の心を長く独占する自信のある人は誰もいないと考えるからです。当の婦人は特にこのクラブの会員のような性格の持ち主に魅了されるようですので、私はこのことには一層警戒心を抱いている訳です。

私が彼女に望みをかけるのは間違いありません。女性のことをこころよく思っていなかったのですが、私はある明敏な人が書き記したエピグラム³⁾にちなんで彼女のことを悪く思うようなことはありません。それどころか、そのエピグラムを読むと、私はなおさら彼女のことが好ましく思えてく

1) 『アイネーイス』1.74-75.

2) 第48号参照。

3) 出典はマルティアリス「老いについて」。

るのです。ここで私はその人の悪意がマルティアリスからの無断借用から生じていることを明らかにせざるを得ません。

暗闇であなたの柔らかな手を握り締め、
魅惑的なセイレーンの声を聞いている間、
私は限りない激情、辛辣な言葉、苦悶に耐えた。
だが、明るくなると、平常心を取り戻した。

「私たちは貴殿の手紙を貴殿の好意と友愛の顕著な表れと受けとめました。私たちは貴殿の短い顔をオックスフォードにお迎えできるのを心よりうれしく思っています。貴殿の思索によりまして、私たち立法部の賢者は不朽の名声が与えられ、貴殿のお力で個人的な醜さもある程度後世に伝えられますので、私たちは、貴殿が並外れた長所の持ち主とお考えになられ、機会をみて理事会に推薦なさる方々を、感謝の念を抱き、また、最大の敬意を持ってお迎えしたいと考えます。ピクト人のお嬢さんに関しましては、高い方の席に安楽椅子を用意させて戴きます。彼女は見るも恐ろしいご面相で異彩を放ち、絵筆で描いた表面的な体裁よりも彼女の持って生まれたありのままの飾らない醜さの方がはるかに似合うものと確信します。表面的な体裁というのは、(貴殿がとても巧妙に述べていらしたように)⁴⁾あっけなく消え失せてしまい、このうえなくお人好しの崇拜者が挨拶、つまり、正確には不意に香しいキスをし、彼女の溶ける唇を奪えば、聖堂は傷つくかも知れないのです。要するに、ピクト人の顔で風雨に耐える顔といえばカーバンクル博士⁵⁾の着色しかないのです。もっともこの着色は、実際には、大量の絵の具が必要となりますが。カーバンクル博士はゼウクシス⁶⁾とともに「不変の彩色」を誇り、しばしば、女性に向かって、今日行き渡っている「キスに耐える着色をした

4) 第41号参照。

5) 第17号、第32号参照。

6) プルタルコス『ペリクレス伝』参照。ゼウクシスはヘラクレス生まれのギリシャの画家。

いのであれば、化粧に頼らずに酒をのみなさい」という金言を口にします。そして、その効き目は、ポストマン紙に掲載され、すりこ木とすり鉢で名高い我が国のヒポクラテスが考案した化粧品⁷⁾と同じくらいあっぱれなものです。この化粧品を使用すると、間もなく、顔の血色がよくなり、元気で快活になるのです。今では、精神の高ぶりを直すのに最適で定評のある処方も完成しています。ところで、女性の候補者に話題を戻しますと、彼女は自分を取り戻し、二度と偽りの顔色をさらすことはないものと私は考えています。彼女は私たちのクラブに最大の敬意を表した女性第1号ですので、またたく間に、散文でも韻文でも、彼女は現代の最も醜い婦人として謳われることは間違いありません。そして当クラブにおいて自分と同じくらいぞっとするような崇拜者と顔を合わせることになるのです。長い顔のご婦人には貴殿がすでに見抜かれている以外の何か深いお考えがあるのではと私は思います。おそらく、彼女は観察者殿に、友愛を超えた愛人としての気持を抱いているものと思われます。もしそれが事実であるなら、私は彼女の選択を称賛せざるを得ません。そして、このような両極端の二つの顔の間に、人種を改良し両家のご面相を矯正することが可能な唯一の手段として、私の力で、友好的な関係をもたらすことが出来ればうれしいと考えています。さらに、彼女はとても弁の立つお方ですので、貴殿はご自分の第1子が生まれても口がきけないかも知れないと危惧する必要はありません。そうでなければ、貴殿の場合はそれを懸念するそれなりの根拠があるようですから。率直に言いますと、私はこの件には不都合なことは何一つないものと考えています。というのは、彼女はジョン・アップル⁸⁾のような顔の持ち主ではありませんが、65歳のときに大胆にも15歳の娘さんと結婚し、最近死亡したある友人が、亡く

7) ポストマン紙やスペクテイター紙には、ポール・チェンバレン博士お墨付きの「水晶化粧品」をはじめ、化粧品の広告がいろいろ掲載された。

8) 2年間もち、しなびたときが完熟だといわれるリンゴ(OED)。パプテスマのヨハネの祭日の頃熟れるので、英語で John-Apple とか Apple-John と言われる。

なるまでの5年間に、結婚したときは自分は老けて見えたが、自分と配偶者二人合わせてやっと80になるのだと、さかんに私に言っていたように、ヘカティッサ夫人も結婚式の日には自分の顔がとても長く思えるかも知れませんが、そのうち、観察者殿と自分の顔を合せてやっと半エル⁹⁾になるだけだとまっとうな主張をすることでしょうから。私の前任者の非常に立派な「顎」弁護士殿は、常々、これは夫と妻の実に釣り合いのよくとれた卵型にほかならんと主張していました。だが、これは、これまで女性に何も期待したことの無い貴殿には不慣れなことですので、そのことについて考慮する時間をさしあげます。最終的には、私の考えが貴殿にお分かり戴けるものと期待しています。何卒よろしくお願いします。

敬具

ヒュー・ゴブリン・プリーシズ

つぎの手紙は短いものですが、私に対する称賛の気持ちが伺えますので、公表しない訳にはいきません。

拝啓

貴方は先週の火曜日の紙面¹⁰⁾にて、笑いという極めて奇妙な現象を説明するために、ホップズ氏の仮説を持ち出されました。貴方が採り上げなさいましたので、その仮説はありがたみを持つものとなりました。なぜなら、ホップズ氏の仮説だけを繰り返していたら、誰もそれを気に留めなかったでしょうから。ところで、現在つぎのような厄介な問題が生じています。つまり、ある人々が貴方の記事を読みましてお腹を抱えて笑ったのです。実は、貴方が並みの節操の持ち主ではなく、盛りだくさんな喜劇の場面に対しても笑わずに頑張れるような人物であるに違いないという訳です。さて、世間には、貴方が「自分よりも劣っている」愚かな人物であるとみなすほど分別を失っ

9) 1エルは長さの単位で、45インチ（約114.3センチ）。

10) 第47号参照。

ている人はごくわずかです。そういう訳ですからどうか、貴方の笑いについての仮説のあかしを立てて戴けませんか。

敬具

Q.R.

愚者の月26日木曜日

拝啓

あなたの手紙に対しましては、私はあなたに思い出して戴きたいと強く望まざるを得ません。あなたが私の新聞がとても愉快だと思われたとき、笑った相手は、私ではなく、白痴やドイツの廷臣やぼかんと見とれる人や道化師や小間物商やかつぎ屋やあざけりの標的だったのだということにお気づきになられることでしょう。

敬具

第53号 1711年5月1日(火曜日)

【スティール】

ホメロスでさえ居眠りをしているところを目撃された。

(ホラティウス)¹⁾

寄稿者の数がとても増えましたので、彼らの申し出を頻繁に掲載しない訳にはいかなくなりました。

観察者殿

目に見える創造物のうちで最も美しいものである女性に光彩を添えようとなさっておられる貴方のご努力は好評であり、好結果をもたらしているとお知らせできるのを嬉しく思っています。姉ラティーシャに対するダフネの勝

1) 『詩の技法』359.

利²⁾は、私が出席した数度のお茶の集まりで話題に上りました。そして貴方が婦人を理性的な存在と考え、我が国でも大いに優勢を誇っているまるで女性には魂がないような扱いをするイスラム教の風習³⁾を追放しようとしていることを知ってご婦人方が大いに満足しているのに気づきました。私も女性を正當に評価し、この敬愛すべき人間性を完成させるには、彼女たちの大望をきちんと機能させ、何が真の美点なのかということを絶えず意識するようになるれば、欠けている点は何もないように思えると言わざるを得ません。例の慇懃なところがほとんどなく質実な哲学者エピクテトス⁴⁾は、教養のあるセント・エヴルモント⁵⁾と同様に、女性を理解していたように思えます。そこで、彼はこの点を実にうまく言い当てています。「若い女性はある年齢に達すると、自分たちが女と呼ばれているのを耳にする。そして彼女たちは自分たちの唯一の本分は男性を喜ばすことだと思い込まれる。そこで、早速、着飾りだし、容姿を磨き立てることにすべての望みを託すのだ」と彼は言います。「それゆえ、敬意が払われるのはひとえに美德と謙虚さと思慮深さをもった振る舞いに対してなのだということを、あらゆる手段を講じて彼女たちに分からせることは価値あることなのだ」と彼は続けているのです。

さて、本論をさらに追求し、女性の向上を目指したいという貴方の関心事をより効果的なものにするために、私は、例えば美德を伝えると言われている例の交感の粉薬⁶⁾を塗布する新しい方法を提案したいと思います。すなわち、女性を飾り立てるには、恋する男性に新しい教育を施し、これ以上偽の魅力や架空の美に惑わされないようにさせるべきなのです。私たち男性が女性に対する評価を常にきちんとしていれば、女性はこれほど頻繁にむやみに

2) 第33号参照。

3) トルコについては、イギリスでは、しばしば女性が低く見られており、天国からも排除されていると紹介されていた。

4) ジョージ・スタンホープ訳『エピクテトス：彼の倫理』（1694）486頁。

5) 第33号参照。

6) 「交感の粉薬」とは、「交感」つまり、血をしみ込ませた布を傷口にあて、その親和力によって傷が治癒するという考えに基づく。

評価を受けようとは思わないことでしょう。分別と美德を備えた女性に魅了されることは、男性の悟性と倫理観を向上させることになり、情念もそれが吹き込まれる対象によって気高くなるのです。そして、相手方も、賢明で気品のある男性に好まれようとすることによって、低劣な長所やたしなみとは無縁になるのです。従って、女性をさらに一層好ましくするひとつの方法は、男性をもっと徳高くすることだと私は考える次第なのです。

敬具

R.B.

4月26日

拝啓

先週土曜日の新聞⁷⁾を読みまして、少なからぬ憤りを覚えました。でも、私は、貴方がリボンやブローードが氾濫し、フランスとの和平によって、女性がさらに目新しいいろいろな見栄を取り込むだろうとおっしゃるときには、貴方が私たち女性のうちでも軽率な女性だけを相手にしているのだと考えることにします。どんな方法を用いればこういった女性が理性的になれるか想像しにくいのですが。

とはいえ、貴方の教えがとても有益だと思われる人たちもいらっしゃると思います。あらゆる努力をしても、時々、あら捜しをしたがる世間でどのように振舞ったらいいのか分からなくなる人たちがそうなのです。敬意と思慮分別といった規則に基づいた婦人と紳士との会話を貴方が全面的に非とすることは出来ないかと私は考えています。また、私は、全面的に否定されると、女性は知性を失い、男性は立派な礼儀作法を失うというのはしっかりした意見だと考えました。貴方のおっしゃった無作法な振る舞いのことを考えますと、確かに、ある種見境のない人たちの客間からは、この世で最も育ちのよい男性は追放すべきであり、そうしない人たちは非難されて当然です。貴方のこの

7) 第45号参照。

ご指摘は有益なことだと私は考えます。

敬具

アナベラ

この世で最も育ちのよい男性とはどんな人たちのことか、アナベラから説明があるまでは、この手紙には返事は出しません。

観察者殿

私はこのところ長年にわたって真に不機嫌になるとはどういうことか、そしてまた私の不機嫌⁸⁾が、最高の著作を読み、最も洗練された人々と交際してきたために、ほんの些細な言葉づかいの間違いや垢抜けのしない振る舞いに我慢が出来ないほどの潔癖症にかかっていることから生じているのだということがよく分かっている紳士です。ところで、これまでこの不機嫌を私は賢明な人がかかる異状だと考えてきたのですが、最近の考えによれば、語るべきことが何もない憂いに沈んだみじめな人は誰でも、うっとうしきの口実として不機嫌を挙げているのです。それもさることながら、先日、ある居酒屋で不機嫌を気取っている人物が二人、酒1パイントとタバコを所望し、乾杯をし、ただひたすら酒をがぶがぶ飲み、互いの顔にタバコの煙を吹きかけるだけで、不機嫌を追い払っているふりをしているのを見掛けたのです。この偉大で礼儀正しい人たちの異状に対して、こんな不面目なことが許されてよいのでしょうか。お願いですから、貴方からこの人たちに酒の力を借りなければしゃべれず、煙を介在させなければ言いたいことが伝えられないからという理由では、不機嫌にとりつかれているのではないのだと知らせてやって下さいませんか。もし貴方に大急ぎでそうして戴けないとすれば、私としては、この異状とは完全におさらばして、今後は低俗な連中と愉快にやっこうと思います。

8) ふさいだ女性の脾臓すなわち不機嫌、憂鬱は、当時の文学でしばしば触れられた上流社会に見られるひとつの症状。ポーブ(1688-1744)の『髪の毛盗み』第4の書(1712)に伺えるものが最も良く知られている。

敬具

拝啓

貴方のお書きになられた内容からすると、私は毛嫌いされている「みつめる人」⁹⁾なのですが、今は心を入れ替えていることをご理解戴きたいと思います。ところで、貴方は礼拝の場での私たち男性の振る舞いに対してとても厳しい見方をなさっていらっしゃいますので、女性を完全に男性の視線から守るということに関しては、女性だけをあまりにも一方的にえこひいきなさらないようにお願いします。もし女性があらゆる手を尽くして私たち男性の目を引き付けようとしていたら、女性に目をやることは彼女たちより私たち男性の方が罪があることなのではないでしょうか。この前の日曜日、私はたまたま美しい盛りの若いご婦人方で溢れている会衆席に閉じ込められたのです。お祈りが始まったとき、私は懺悔のためにひざまずく場所もありませんでした。そこで私は精一杯目を動かさないようにしていましたが、とうとう若いご婦人のうちで詮索好きなある人が、私の視線を射止め、私の気持を彼女に釘付けにさせたのです。詮索好きな人は手と目と扇を使うことは貴方はご存知と思います。このうちのどれかがひっきりなしに動いているのです。彼女は自分が実際には会衆の中の誰か色目を使う人あるいはみつめる人の称賛的にはなっていないのだと考えている訳です。私は、周囲ぐるりを取り囲まれ、どう振舞ったらいいのかすっかり戸惑っているとき、この詮索好きな人が私の目の前でひざまずいたのです。彼女は想像できないほどの美しい胸を見せびらかしました。その胸は燃えるように波打ち、きめ細かく形のよい腕には扇が握られ顔をおおっていました。当然、私はここから目を移すことは出来ませんでした。私は彼女の扇にも目を留めざるを得ませんでした。その扇にはこういった場所で見るとは相応しくない様々な絵姿が描かれていました。扇の胴体には、入念な花冠の掛け布のついた紫色の天蓋の下に、半裸姿のウィ

9) 第20号参照。

一ナスとおぼしき人物が横たわっており、その脇に眠っている彼女にせつせと扇で風を送っているキューピッドたちが付き添っている図が描かれていたのです。そして彼女の背後には、絹の柵ごしに覗き込み、今にも柵を突破しそうなサテュロスとおぼしき人物が描かれていました。私はさかんに目をそむけようとしたのですが、離れていこうとする視線を呼び戻すために、長年にわたってわざと磨きをかけてきた詮索好きな人の眼差しの魅惑に引き留められたのです。私の苦情はお分かり戴けるものと思います。どうかこういった災いを生み出す詮索好きな人々のことを考慮して戴きたいものです。待伏せの方があからさまな攻撃より恐いのと同じように、詮索好きな人の方がみづめる人よりも悪質だと貴方がお考えになられるのは間違いないものと私は確信しています。

敬具

扇と目を用いるこの詮索好きな人はピクト人として考慮すべきです。よって、先に進みます。

観察者へのラティウム王¹⁰⁾からの挨拶

余が民間人の文人と書状を交わすのは、王としての威厳を低下させるとお考えのむきもあろうが、余は余のためを思っを行なわれるすべてのことに対して多大の敬意を払っているので、貴殿が魔法をかけられたサヴォイ城に監禁されている余のために公表されること、さらに貴殿が不幸をかこつ君主に補給金をと述べられていることに対して謝意を表わすことを余の品位にかかわることだとは考えていない。貴殿のこの時宜を得た熱意によって、余が資金援助の申し出さえすれば、様々な人が援助の手を差し伸べる気になっていると考えらる。そこで、余はそういった人々の善意を斟酌し、援助をしやすくかつその援助を受ける余に満足のいく方法を考え出した次第である。つまり、5月2日水曜日、ハバーダッシュャーズ・ホール¹¹⁾に合奏団を招き、当催

10) 第22号参照。ラティウムとはオペラ『カミーラ』の登場人物。

11) ハバーダッシュャーズ・ホールはオールダーズゲイト近くのウッドストリート、

しに余が臨席の榮譽を与え、出席者には一人2 シリング6 ペンスを課すことにした次第である。貴殿が余の意向を公表し、同時に、ロンドンおよびウェストミンスター両市のすべてのお茶の集まりの場でこの意向に目を通すようにとの指示を付して戴けるものと期待する。何卒よきはからいを。

ヴォルススキの王、ラティウム

1711年4月28日、ヴィネガー・ヤード¹²⁾ 3階の宮廷にて記す。

第54号 1711年5月2日(水曜日)

【スティール】

つまらぬことにあくせくしていると、

肝腎なことがおろそかになる。(ホラティウス)¹⁾

つぎの手紙²⁾は学識のあるケンブリッジ大学から受け取った第1 信です。で、私としましては、敬意を表して公表せざるを得ませんでした。これをお読みいただくと、かの名高い学問の府に賢人たちの新しい学派が出現していることがお分かり戴けます。おそらく、これは現代が生み出したおあつらえ向きの学派と思われます。

ケンブリッジ、4月26日

観察者殿

私は貴方が自由七科および科学を広く奨励なさっておられると信じていますので、これから述べますことは私たちの間では極めて馴染みのあるものですが、私の記憶の及ぶ限り古今いずれの著述家にも注目されていない賢人の

メイドンレインの北側に位置していた。

- 12) ヴィネガー・ヤードはドゥルリー・レイン劇場のすぐ南側のドゥルリー・レインから西に向かう小さな通り。

1) 『書簡詩』1.11.28.

2) 初期の編集者によると、この手紙はロレンス・ユースデンが書いたとされている。

学派に関することなのですが、それを貴方にお知らせしても貴方には歓迎されるものと考えた次第です。この学派の賢人のことは、私たちの大学の言葉で、「ルーンガーズ」と呼んでいます。ほかの多くの事柄の場合もそうなのですが、この場合も同様で、この種の賢人について何も言及していないのは古老たちの手落ちだったのだ、と私は考えています。確かに、彼らがたえず歩き回っているのを見掛けるので、中には、彼らのことを一種の逍遙学派（アリストテレス学派）だと主張する人々がいます。だが、私はそう考える人たちには、古代の逍遙学派も随分歩き回りましたが、著述も随分多かったのだということ（このことはアリストテレスその他を考えれば分かります）を、考えて戴きたいと思います。ところが、我が教授陣の大半は、著述に関しては全く執着しないことで知れ渡っているのです。また中には、この学派の主だった人たち数名が、相当な皮肉屋で日なたを喜ぶので、ディオゲネスの流れをくんでいるのだと主張する人たちがいます。だが、この指摘もまた、ディオゲネス³⁾は終始狭い桶をすみかにすることで満足していましたが、我が賢人たちはディオゲネスの考えにはほど遠く、ほんの半時でも立派で行き届いた使いかたのよい部屋に閉じ込められるだけで自分たちにとっては死を宣告されたも同然だと考えるのです。また、彼らの頭脳の明晰さから、ルーンガーズの系図を（プラトンあるいはソクラテスだったと私は思うのですが）研究と学識を積んだにもかかわらず、分かっていることは自分は何も分かっていないということだけだと告白したあの偉人にその起源を求めている人たちもいます。これはあまりにも浅薄な主張であり、すぐに論駁されるのは目に見えています。

私はこれら賢人について時間を割いて勤勉に考察して来ました。そして、やっと資料が整い、論文をまとめているところです。そこでは、彼らの金言、謹厳な言行、生活態度などと共に、この名高い学派の台頭と発展について述べたいと思います。私は、間もなくディオゲネス・ラエルティウスの新版を

3) ヒックス編『ディオゲネス・ラエルティウス、すぐれた哲学者たちの生涯』参照。

発表する予定の友人を説き伏せてこの拙論を補遺として付け加えさせましたので、(まずもって観察者殿にお知らせいたしますが)ここで世間の皆様私の主要な所見のいくつかを簡潔にご紹介したいと思います。まず金言を二、三挙げておきます。この学派そのものの基盤となっているものですが、基本的なものは、「万物にとって不倶戴天の敵であり破壊者である時は、しっぺ返しを受けるべきであり、可能な限りのあらゆる手を尽くして、破壊し抹殺すべきだ」ということです。つぎに彼らが好むものは「仕事は、ひとえにならず者のために、研究は、とんまのために考え出されたのだ」というものです。三つ目は一見滑稽に見えますが、彼らの生活に大きな影響力をもっておりま。それは「家の中には悪魔がいる」なのです。ところで彼らの生活態度については、長々と論じることが出来ますが、詳細は予定しています論文のためにとっておき、ここでは主だったものだけひとつふたつ挙げておきます。大家たちは街の看板や窓をすべて調べて「人間の様々な風習」⁴⁾を検分しています。中には、大変な博識で、屠殺業者がいつ子牛を殺すか、老婆の飼っているネコがいつお産の床につくか、その他重要と思われる実に様々な事柄が分かる人がいます。ある古老の賢人は、毎日2、3時間日時計のことを考え、「たとえ太陽が照っていなくても、太陽に忠誠を尽くす日時計のように」⁵⁾日時計に忠誠を尽くしています。若い研究者たちは、ローンボウリング場⁶⁾やビリヤード台⁷⁾などについて考察を深めて満足しています。以上は私の論文の概略を知るのに役立つことでしょう。貴方からの激励の言葉をお待ちしています。

敬具

4) ホラティウス『詩の技法』142参照。

5) サミュエル・バトラー (1612-80)『ヒューディブラス』3.2.175-6. (1663-78) ヒューディブラスは長老教会派の頑迷な保安官で、偽善と利己主義が諷刺されている。

6) ボウリングは当時人気があり、アン女王時代にはボウリング場の数が大きく増えた。

7) ビリヤードは私邸だけでなくコーヒーハウスでも行なわれた。

公平を期すために、我が寄稿者の学識のある史家からお知らせ戴いたケンブリッジでの呼称とは違いますが、以前私は別の大学でこの学派のことを経験したことがあるのだと言っておかなくてはなりません。彼らは自分たちの組織の規則を厳格に適用することで、他のいかなる研究者よりもさらに自分たちを傷つける人たちとみなされました。弱視になる、あるいは、時々頭痛をかかえるほど自分を傷つける人はまれですが、これら賢人は茫漠とした無力、怠惰、倦怠、そして別の場所への移動に対するうとましさと同時に自分の居場所にいることに対するある種のもどかしさといったものにすっかりとりつかれているのです。

ルーンガーズは、互いに目立とうとしないで、単に人類の一員であることに満足します。彼らは、過去には関心を払わず、また、未来に期待を寄せずに、時を過ごすというよりはむしろ時を耐え忍んでいるのだと言えるかも知れません。彼らが人生について知っていることといえば、現時点のことだけであり、それすらも味わうことはありません。この手の人がたまたま資産家である場合には、時の消費は馬車に譲られ、生活は彼自身の喜びとか苦しみではなく、馬車の移動によって測定されます。おそらく、この手の賢人が自分から提案できる主たる楽しみは、衣裳道楽でしょう。思うに、これは自分自身にさえ飽きている人物の単調さを打ち破ってくれるのでしょうか。こういった二つの気晴らしによって世間でまずまずの人物となった賢人を私は知っています。街の公の集まりには一度といって同じ服では現れず、今バースにいるかと思えばつぎの瞬間にはタンブリッジ、つぎにはニューマーケット、そしてまたロンドンと、せわしなく馬車を走らせる彼は、時の経過と共に、彼の馬車はあらゆる所で話題にのぼるようになったのです。ルーンガーズが大学生活をやめ、大学時代よりももっと優雅に社交界に出入りすることもなく、先祖の地所に引きこもると、彼らは、たいていの場合、日々、犬の群れと行動を共にしたり、家禽をキツネから守ることに終始するのです。私はこの手の人がこれまでそれ以外の方法で、世間で評判となったことがあるのを知りません。私は、ロンドンにいたかつて大学を経験したことはないが、ル

ーンガーズとの威厳を獲得するにいたった人たちについて調べてみようと思っています。そして、我が寄稿者に、彼の著作の飾りになるように、全く何もせずに生活している人たちの名前と来歴、そして無為という耐え難い苦心を克服するために、コーヒーハウスやチョコレートハウス⁸⁾を転々としているその様子をお知らせする積りです。

第55号 1711年5月3日(木曜日)

【アディソン】

あなたの胸中に激情が君臨しても、
奴隷であり虐げられているとは思わないか。(ペルシウス)¹⁾

人々が生計を立てている様々な職業の大半は、満足を求める気持か貧困を恐れる気持のどちらかにその源があります。それぞれ度を超すと、満足を求める気持は「贅沢」に、貧困を恐れる気持は「強欲」に変わります。これら二つの行動原理は方向性が異なりますので、ペルシウスは強欲に導かれベッドから起きだして長旅に出て、その後、贅沢に説得され家に留まった若者についてとても愉快的説明をしています。私はここで、この「強欲」「贅沢」という二人の架空の人物の弁明について、原文²⁾にドライデン氏の翻訳を付して詳しく書き留めたいと思います。

ひとりの時であれ、遊女に膝枕をさせている時であれ、怠惰な朝寝をしているときに、強欲は、起きろ、起きろ、と言います。あなたは再びいびきをかき、手足を伸ばし、あくびをしますが、すべて効き目はありません。厳しい暴君は有無を言わさないのです。暴君の命令で、不精者は淡々起きだしま

8) コーヒーハウス、チョコレートハウス、ティーハウスの間には明確な区別はなかった。このどこでも、コーヒー、チョコレート、ティーが飲めた。

1) 『諷刺』5.129-30.

2) 『諷刺』5.132-55.

す。どうすればいいのだ、と不精者は言います。なんだって、と主人は言います。起きて、支度をして、直ぐに出かけるのだ。船に黒海の魚を積み込むのだ。疲れたラクダの背中から、亜麻布、ビーバーの毛皮、コスのワイン、貴重な胡椒、シバの香料をおろし、直ぐに市場に出すのだ。儲けるんだ。嘘で塗り固めるのだ。これは健全な罪なのだ。でも神様が、とあなたは言います。愚か者、それでは飢えればいい。商人として突っ走るか、でも、天国に行きたくはないか、五分五分の気持ちに揺れます。海に向かうことにし、奴隷たちに荷造りをさせ、それぞれの背に荷を背負わせる。今や、あなたの航海を妨害するものは何もない。でも、あの柔和で肉欲にふける「贅沢」という王子がいるのです。彼はつぎのようなご丁寧な質問をします。どうして船を準備するのです。どういった目的でそうするのです。海の危険を冒すとはなんと馬鹿げたことだろう。あなたは名高いベツレヘム精神病院とは無縁ではないのか。船室のマットレスの上に閉じ込められ、雑役夫と共に黒パンを食べ、革袋の臭いのする気の抜けたワインを、汚い革のジョッキか脂ぎったカエデのコップで飲むのか。あなたは貯えを6分から600以上に増やすために、こんな状態を我慢するのか。気ままに過ごし、存分にあなたの天分を発揮するのです。なぜなら、気楽に生きないと生きることにはならないのだから。あなたの背後に死が忍び寄り、人生は刻一刻とあわただしく食い尽くされてゆくのです。生きている間は生きればいいのか。なぜなら、死神は私たち全員を単なるたわいのない言い伝えにしてしまうのだから。

さあ、あなたは主人として「強欲」を選びますか、それとも「楽しみ」を選びますか。どちらか一方を選び、もう一方ははねつけなさい。

国家が繁栄しており、占領地でも活躍し、外国からの攻撃も受けない場合には、国全体は、当然、贅沢という楽しみに包まれることになります。こういった楽しみはとてもお金がかかりますので、楽しみに溺れる人たちはありとあらゆる貪欲で汚い手を使って新たなお金の調達をすることになります。そのため、安逸、豪勢、楽しみにすっかりそそのかされている人たちにとっ

ては、強欲と贅沢がしばしば絡み合ってひとつの行動原理となります。最も高雅で品行方正なある古代ローマの史家³⁾は、当時手におえなくなっていた国情がローマ人によって鎮圧されたとき、社会全体が全く異なった性質を持つ「贅沢」と「強欲」という二つの悪徳に傾斜したと述べています。そして、カティリナを他人の富を渴望した人物であり、同時に、自らの富を浪費した人物と描いています。権力と富をほしきままにしていたときの共和国についてのこの所見は、安逸と繁栄にあぐらをかいているすべての国家に当てはまります。国がこういった状態にあるときには、人々はいつのまにか互いに虚飾と華麗を競うようになり、外国から侵略されるのではないかという懸念は消え失せ、もっぱら手に入るあらゆる楽しみを享受することになるのです。これは、当然のごとく、強欲を生み出し、無節操に富を追い求めることになります。

こういった二大行動原理について考察していると、私の思考はつついささやかな寓話のようなものに入り込まざるを得ませんでした。読者のみなさんには、以下その寓話を紹介したいと思います。

互いに絶え間なく争っている二人のとても強力な暴君がいました。その暴君の名前は、一人は「贅沢」で、もう一人が「強欲」でした。この二人の目標は、それぞれ、人心を完全に掌握することでした。「贅沢」には、彼に仕える「楽しみ」「陽気」「虚飾」「流行」といった将官が付き従っていました。同様に、「強欲」には、彼に忠誠を尽くす「飢餓」「勤勉」「心配」「警戒」といったとても強い士官がついていたのです。「強欲」にはまた、すぐ傍には顧問官が四六時中控えており、彼の耳元で何かを囁いています。その顧問官の名前は「貧困」でした。「強欲」が「貧困」の助言で身の処し方を決めるのに対して、彼の敵対者は完全に「豊饒」の指図と助言に左右されていました。「豊饒」は「贅沢」の首席顧問官兼首相であり、「贅沢」に代わって施策を調整し

3) サルスティウス『カティリナの戦い』5.4.カティリナ(108?-62B.C.)は古代ローマの政治家で、キケロ政府転覆を企てたが失敗した。

ます。そして、片時も彼の元を離れませんでした。このようにして、この強力な二人が帝国をめぐる争っている間、彼らの勝ち得たものは多様に変化しました。「贅沢」はある人の心を捉え、「強欲」はまた別の人の心を捉えました。父親は「強欲」の旗印のもとに加わり、息子は「贅沢」の元に加わるといったことがよく見られました。妻と夫の所属が異なるといったことも珍しいことではありませんでした。それだけでなく、同一人物でも、若いときには一方に属し、年を取るともう一方に走るといったことがさかんに見うけられました。現実には、賢明な人たちは中立を守りましたが、残念なことに、その数は多くはなかったのです。やっと、この二人の君主が互いに戦争をするのが嫌になり、双方の顧問官を交えない形で会談を持つことに合意しました。「贅沢」が会談の口火を切り、果てしない戦争の状況について述べた後で、敵方の「強欲」に向かって、率直に、もし耳元に悪知恵を吹き込み、あなたにいわれない不安と偏見を植え付ける邪悪な顧問官である「貧困」の教唆がなければ、二人は親友でいられると思う、と語ったということです。それに対して、「強欲」は、敵方の首相の「豊饒」は絶えず楽しみをちらつかせ、大切な欠乏に対する警戒心を追い払い、結果として「強欲」政府が基盤としている行動原理を侵害しているので、「貧困」よりもはるかに害を撒き散らす顧問官だと思う、と応戦した。最終的に、和解に至るために、二人は双方とも直ちに顧問官を解雇するという条件に合意しました。事態が和平に向かってここまで整って間もなく、その他の意見の相違もすべて、今後は二人は味方であり同盟を組んで生活をし、勝ち得たものはどんなものであれ、二人で共有することにするとといった段階まで調整ができました。そういう訳で、今日では、「贅沢」と「強欲」は心を同じにして、同一人物の心を二人で分ち持っているのです。このことに対して、私はつぎのように付け加えておきます。上述のように顧問官を解雇してからというもの、「豊饒」の代わりに「強欲」が「贅沢」に助言をしており、一方、「強欲」には「貧困」の代わりに「贅沢」が付き従っているのです。